

要旨

【背景】胎児異常や中絶に深く関連する出生前検査は遺伝医学の進歩と妊婦のニーズにより受検者が増加している。遺伝診療部門を中心とした遺伝カウンセリング体制整備がなされてきたが、出生前検査実施施設の多くは一般産科診療部門において提供されていると予測される。出生前検査を受検する妊婦に携わる看護職者の関わりの実際に関連する報告は十分とはいえず、妊婦のケアに関して困難感を抱いている可能性がある。

【目的】遺伝診療部門をもたない医療機関における看護職者の出生前検査受検者に対する関わりの内容を明らかにし看護職者への支援方法を見出すことを目的とした。

【方法】出生前検査を実施している遺伝診療部門をもたない関東近郊の医療施設1施設に勤務する看護職3名を対象とした。半構成的面接法による質的記述的研究とし、データ収集期間は、2016年9月から2016年12月上旬であった。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号：16A-038)。

【結果】羊水検査を受ける妊婦に対する看護職者の関わりの実際として【妊婦との関わり
の難しさを感じ情報収集に躊躇する】【妊婦から検査の詳細や意思決定に関する質問を受け
る】【検査直前の深い話題を控える】【検査中の妊婦の不安軽減に努める】【担当した妊婦の
検査結果を気かけ確認する】等の9つのカテゴリに分類された。看護職者の意識として
【受検に至るまでの経緯や妊婦の心理状態を推察する】【妊婦の負担を配慮して踏み込まな
い】【妊婦の表情・態度から会話するタイミングを見計らう】【受検後も妊婦の心理状態を推
察しながら傾聴する】【妊婦を理解し支援したいという気持ち】【妊婦が熟慮の上で受検に臨
むことを期待する】【強い記憶として残る中絶を受ける妊婦の看護体験】、【受検する妊婦に
対する医療者としての意識】、【検査前の十分な情報提供と意思決定支援の必要性】【外来―
病棟間の連携に向けた体制作り】【遺伝学的知識習得のための自己研鑽】等、15のカテゴリ
に分類された。協力者らは、初めて対面する妊婦との関係性が未確立であること、時間的制
約があること、妊婦からの質問に対応できるかわからない不安を理由に妊婦との関わり
の難しさを感じ情報収集に躊躇していた。

【結論】今後の課題として、情報共有のための統一ツールの作成や施設内の部門間連携の
ためのツールの有効な運用基準の作成、受検者の看護を担う助産師を中心とした看護職者の
遺伝学的知識習得のための遺伝看護教育、意思決定支援、看護倫理に関する現任教育強化の
必要性が示唆された。